

派遣者番号	R6K01	氏名	佐藤 純
研究主題 —副主題—	校内研究を通じた学校改善の取組 —校長・研究主任へのインタビューを通して—		
派遣先大学	創価大学 教職大学院	指導担当者	渡辺 秀貴・三津村 正和
所属	府中市立日新小学校	所属長	渡邊 妙子

キーワード： 校内研究 学校改善 事例-コード・マトリクス

要旨： 本研究は、校内研究を通じた授業改善の取組に焦点を当て、校長と研究主任のインタビューを基に分析したものである。近年、教員の質の確保や指導技術の継承が課題となる中、教員同士の協働や同僚性の向上が求められている。校内研究は、学校独自の課題解決に向けた重要な営みであり、教員の指導力向上に寄与する。本研究では、東京都内の4校を対象に、校長と研究主任への半構造化インタビューを実施し、事例-コード・マトリクスを用いて分析を行った。

結果として、校内研究を通じた学校改善には三つの要素が重要であることが示唆された。第一に、「職層を越えて語り合う関係の構築」が教員の同僚性を高める要因となる。第二に、「研究の言葉を日常の実践に落とし込むこと」が、校内研究を形骸化させず、授業改善に直結させる鍵となる。第三に、「校内研究とクラス経営のつながりを意識すること」により、教員の主体的な学びが児童の成長に反映され、学校全体の変革につながる。本研究は、これらの要素を提示することで、校内研究をより効果的に活用するための実践的示唆を与えるものである。

校内研究を通じた授業改善の取組

—校長・研究主任へのインタビューを通して

創価大学教職大学院教職研究科（人間教育実践リーダーコース） 佐藤 純
キーワード：校内研究、学校改善、事例-コード・マトリックス

1 問題と目的

2024年度の東京都における小学校教員採用試験における受験倍率は約1.2倍となり、教員の人材としての質の確保も課題となっている。また、若手教員の比率も年々高くなっており、「指導技術の継承」が課題として挙げられている。ただでさえ多忙を極める教育現場の現状に加えて、教員同士が協働して教え合い学び合うといった「同僚性」の希薄化も指摘されており、教員が職場において資質・能力を向上させて教職という仕事の成就感を得ることも難しい状況となっている。

このような状況においても、学校独自で課題を設定して教員が協働的に授業研究を実施し、授業改善を図るフォーマルな時間は確保されている実態がある。それが、伝統的に行われてきた校内研究という営みである。教員の職務のおよそ60%が子供に向き合う授業であり、校内研究で教員の指導力向上に取り組むことは非常に有効である。

本稿では、校内研究を「教職員集団が校内の課題に対する共通の目標を共有し、協働的な同僚性を発揮させ、教員それぞれが資質能力を向上させる営み」と定義している。この校内研究を通して学校改善に取り組んできた校長・研究主任の思いや願い、具体的な取組に着目して分析・考察することで、校内研究を通じた学校改善への提言を試みることにした。

2 方法

(1) インタビュー対象者

事例対象校は、研究指導者より事例研究の対象校として紹介を受けた東京都内の公立小学校4校の校長及び研究主任である。

(2) 分析手続き

本研究では、1名あたり約1時間の半構造化

インタビューを行った。質問内容は「校内研究にかける思い」「取組」「課題」「変化」についてである。また、佐藤(2008)の「事例-コード・マトリックス」を参照した。インタビューの音声データを逐語録化し、分析テーマに該当する箇所の文章を意味内容別に小見出し（オープンコード）を付けた。続いて、オープンコードを比較・統合しながら更に抽象度の高い言葉（焦点的コード）に集約するため、コード同士の関係を整理した。このように表に可視化することで、各事例校の共通性と同時に、個別性も見いだし、校内研究を通じた学校改善の取組の分析ができると思った。

3 結果

紙面の都合上、以下2点の概要を示す。

3.1 「校内研究にかける思い」（省略）

3.2 「校内研究における取組（校長）」

【表1】校内研究における取組（校長）

焦点的コード	オープンコード
授業改善への意識の共有	意味を限定して伝える
	子供から収集したデータを活用する
	授業参観の機会を生かす
	熱量のあるミドルリーダー
研究主任の育て方	人に仕事を任せることを教える
	研究について語り合う
	心からの称賛で信頼関係を築く
	対話を通して熱を伝播させる
教員との関わり方	立場を超えて激論を交わす
	本当の疑問・要望を探る
	対等な関係を築く
	ともにある姿を示す
研究の主体性による教室の活性化	溜め込んでいる不安を吐き出すよう促す
	自ら意見発信できる研究部を作る
	教員の学びと子供の学びを一致させる
	教員の主体性を教室に連動させる
同僚性が高まる組織作り	教員同士のシナジーが生まれる人材配置
	インフォーマルな会話による人間関係の促進
	自然と話せるような環境を醸成する

4名の校長から得た音声データを逐語に起こ

し、整理・分析した結果、校長が校内研究を成功させるために行っている取組は、以下の通りである。

〈授業改善の意識の共有〉では、校長は授業参観や子供からのデータ取得を通じて、教職員が授業改善への意識を高める取組を行っている。また、研究用語を限定的に伝え、教職員が理論に惑わされず実践に集中できる環境を整備している。さらに、「熱量のあるミドルリーダー」が研究への思いや探究心を広めることで、校内全体の授業改善意識と研究レベルを向上させている。

〈研究主任の育て方〉では、校長は研究主任との信頼関係を築き、対等な対話を通じて研究への「熱」を高め、校内全体に伝播させている。研究主任が一人で抱え込まず、仕事を他の部員に任せる組織運営を助言することで、研究部全体の意欲と効率を向上させ、時には研究主任への敬意を言葉にして信頼を深めている、研究推進の方向性を共有する姿勢が、研究主任の成長と校内研究の活性化につながっている。

〈教員との関わり方〉では、校長は教職員の研究への疑問や要望を探り、対等な関係を築きながら共に研究に取り組む姿勢を示している。また、不安を吐き出せる場を設け、教職員が研究に主体的に関われる環境を整備している。

〈研究の主体性による教室の活性化〉では、校長は、自発的に意見や提案ができる研究部を育成し、教員の主体性を教室での児童の学びに連動させる取組を推進している。教員の学びと子供の学びを一致させることで、教室を活性化することを目指している。

〈同僚生が高まる組織作り〉では、校長は教員同士が研究や授業について自然に話し合い、高め合える環境を整備している。人材配置やインフォーマルな交流を通じて、同僚性を高め、組織全体の連携と成長を促進している。

3.3 「校内研究における課題・変化（省略）」

3.4 「校内研究における取組（研究主任）」

4名の研究主任から得た音声データを逐語に

起こした結果を右のマトリクスにまとめた。

【表2】校内研究における取組（研究主任）

焦点的コード	オープンコード
研究を浸透させる	研究の良さを伝えるメッセージャー
	用語の解釈のずれをなくす
	噛み砕いて自分の言葉で伝える
	思いを全体に共有する
研究部としてのビジョンの明確化	研究部内での意思決定を尊重する
	授業観察の視点を提供する
	コミュニケーションで調和を図る
	効果的な協議会を模索する
校長との調和	校長との相談の機会を増やす
	校長と研推の協力体制を作る
	校長との対話から組織を変える
職員との意図的な関わり	同僚との日常的な関わり
	互いを気かけられる雰囲気作り
	ニーズに合った関わり
研究が自分ごとになる工夫	全学年での研究授業の実施
	意見を言える状態を担保する
	教員の関心の把握
	授業者の思いを尊重する
役割の明瞭化	苦手を補う副主任
	リーダーとしての立ち位置
	頼りにできる副主任

研究主任はまず、〈研究を浸透させる〉ために、研究の良さを共有し用語の解釈を統一する工夫を重視する。また、研究部として全員が思いを共有し、より効果的な協議会を模索しながら〈ビジョンの明確化〉を行う。また〈校長との調和〉を図り、対話や連携を通じて研究の方向性を共有したり、〈職員との意図的な関わり〉から互いを気遣う雰囲気を醸成したりしている。さらに、〈研究が自分ごとになる工夫〉として、意見を引き出し全学年が研究授業に関わる仕組みを整備している。そして、人材の〈適材適所〉を意識し、役割分担を明確にして効率的な運営を行っている。

4 考察

本研究では、校内研究を通じて教職員の同僚性を高め、学校組織の変化と学校改善を促す3つの視点を示した。第一に、「**職層を越えて語り合う関係の構築**」が重要であり、立場を超えた対話と個性の尊重が同僚性を高める基盤となる。第二に、「**研究の言葉を日常的に自分たちの世界に落とし込む**」ことが、業務化や形骸化を防ぎ、研究と授業の一体化を実現する鍵である。第三に、「**校内研究とクラス経営のつながりを意識する**」ことが必要であり、教員の主体的な学びの姿勢が児童の

学びに反映される。職員室と教室の「同型性」により、学校全体が変化することが示唆された。

参考・引用文献

- 1) 東京都教育委員会『東京都教育ビジョン(第5次)』
(https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kyoiku/240830_honbun
2025/02/18)
- 2) 文部科学省『教員をめぐる現状』
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1346377.htm
2024/06/21)
- 3) 志水宏吉「『力のある学校』の探求-〈スクールバスモデル〉について」大阪大学教育文化学研究室『教育文化学年報』3、2007
- 4) 佐古秀一「学校組織の個業化が教育活動に及ぼす影響とその変革方略に関する実証的研究」『鳴門教育大学研究紀要』第21巻、2006年、P41-53
- 5) 文部科学省『チームとしての学校の在り方』
(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1365408.htm
2024/06/21)
- 6) 臼井智美「学校組織の現状と人材育成の課題」『日本教育経営学会紀要』第58号、2016年
- 7) 佐藤学「教師の省察と見識=教職専門性の基礎」『日本教師教育学会年報』第2巻、1993年
- 8) 千々布敏弥「校内研究としての授業研究の現状と課題」『授業研究と校内研修-教師の成長と学校づくりのために』図書文化社、2014年、P10-21
- 9) 佐藤学「Ⅲ 日本の授業と授業研究」『教育方法学』岩波書店、1996年
- 10) 中留武昭『校内研修を創る』エイデル研究所、1984年
- 11) 木原俊行『教師が磨きあう「学校研究」-授業力量の向上をめざして-』ぎょうせい、2010年
- 12) 千家弘行「授業研究会の活性化と同僚性に関する研究-高等学校における取組から-」兵庫県立教育研究所、2010年
- 13) 佐藤学「教育の公共性と自立性の再構築へ」『変貌する教育学』世織書房、2009年
- 14) 上山那々「教員の同僚性を高める研修とは-研修受講者の意識調査から-」『佛教大学大学院紀要』第51号、2023年、P15-32
- 15) 太田裕子『日本語教師の「意味世界」-オーストラリアの子どもに教える教師たちのライフストーリー』ココ出版、2010年
- 16) 鹿毛雅治「授業研究を創るために」『「授業研究」を創る-教師が学びあう学校を実現するために』教育出版、2017年
- 17) 佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2008年
- 18) 伊津野朋弘、吉田浩、榎本和生、上野景三「教師の指導力形成要因に関する調査研究-校内研修とそれを支える校内体制」『日本教育行政学会年報(第7号)』教育開発研究所、1981年、P142-143
- 19) 鹿毛雅治「今、校内研修はどう変わるべきか」『子どもの姿に学ぶ教師-「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」-』教育出版、2007年
- 20) 渡辺貴裕・藤原由里香『なってみる学び 演劇的手法で変わる授業と学校』時事通信社、2020年
- 21) 村上聡恵・岩瀬直樹『「校内研究・研修」で職員室が変わった!~2年間で学び続ける組織に変わった小金井三小の軌跡~』学事出版社、2020年
- 22) 小島弘道『学校改善と校内研修の設計』学文社、2010年